

第二言語の文法習得 - 格助詞二を中心として

On L2 learners' Acquisition of Japanese Particle "ni"

上村文子

Fumiko Kamimura

はじめに

熊本大学で、第二言語として日本語を学ぶ学習者の学習時間は半年から一年ぐらいのものが多く、限られた学習時間の中で、いかに効率的に日本語を習得させるかは、日本語教育の現場にいる者として心を砕くことであるが、そのためには日本語習得の困難な個所とその原因は知りたいところである。

日本語学習者の誤用は日本語習得の困難な個所を示唆している。誤用は、音声・表記・文法など日本語習得に必要な分野すべてに現れるが、文法に関して言えば、助詞、自動詞と他動詞の混同、時制に関する表現、敬語表現などに多く現れる。その中でも助詞の誤用は最も多く見受けられる。迫田（2001）によると日本語学習者の誤用率の最も高い品詞は接続詞であるというが、助詞は使用頻度が高いことから日本語学習者の誤用が最も多く、それだけに日本語習得上の大きな問題となっている。

助詞の中でも、格助詞の習得は学習者を悩ませる。特に初級段階では格助詞が多数導入されるため、初級学習者を悩ませている。格助詞が日本語学習者を悩ませる理由は、一つの助詞に複数の用法があり、また類似した用法が複数の助詞にあるという複雑な働きをする格助詞の特徴によること、それから中国語のような側置詞 (adposition) を持たない言語を母語とする学習者や英語やタイ語のように前置詞 (preposition) を持つ学習者には後置詞 (postposition) としての格助詞の概念をつかむことが難しいということが考えられる。初学の段階で母語にない格助詞の概念をつかむことに学習者の戸惑いが見られることは、日本語の教育現場でも感じることである。

日本語学習者がどの助詞を難しいと感じるかについての調査では、難しいと感じる格助詞の筆頭に二を挙げている。調査対象者は、9カ国から来日中の日本語学習者33名である。（上村・舛井2002）

表 1 難しいと感じる格助詞（複数回答可）

格助詞	ニ	ガ	デ	ヲ	ヘ	ト
難しいと感じる人数	24人	19人	15人	9人	4人	3人

日本語学習者に格助詞ニの習得を難しいと感じさせている理由の一つとして用法が多さが挙げられる。国立国語研究所（1951）はニを10の用法に分類しているが、格助詞ガを2つに、ヲを4つに分類しているのに比してニの用法の多さが分かる。日本語学習者がニを難しいと感じる格助詞の筆頭に挙げた理由もニの用法の多さよることでもあるであろう。その他にも、様々な理由が考えられる。

本稿では、日本語学習者に習得が難しいと感じさせている理由は何かを探るため、日本語学習者の格助詞ニにおける習得状況を調査・分析した。その結果を報告する。

§ 1 格助詞ニの習得順序に関する先行研究

格助詞の習得順序に関する研究は格助詞全体の習得順序を解明しようとする誤用分析研究から、最近ではそれぞれの助詞の用法別習得順序やそれぞれの助詞を要求する動詞の習得順序など、関心の焦点が細分化してきているように思われる。格助詞ニの習得順序に関する先行研究では、ニの習得に関してどのような報告があるのであろうか。次に主な先行研究を見る。（発表年順）

水谷信子（1987）

格助詞の中で最も外国人学習者が理解しにくく感じるのはヲとガの対立と、ニとデの区別である。

ニは「存在」をデは「活動の場所」を表すと考えるため、英語のbe動詞に対応すると感じられる日本語の動詞にデを使うことはほとんどない。しかし「住む」「つとめる」「集まる」などについてはlive, work for, get, togetherなどと考えるせいか動作性を感じてデを用いてしまう。

津留紀子・舛井雅子・柳田恵理子（1997）

初級作文調査ではハ・ガ・ヲが使用頻度、誤用ともに多かった。

ニに関してはexistenceのニとplace of actionのデの区別が難しい。

久保田美子（1994）

英語話者2名の縦断的研究。ヘ（方向）デ、ニ（場所）の誤用が多い。

ニについては、場所のニとデの混同が多く、ニの過剰一般化の傾向がみられる。ただし韓国語話者を対象とした松田・斉藤（1992）によると逆にデの過剰一般化がみられると紹介している。

「入る」「着く」「会う」にヲの誤選択が多い。英語の干渉が考えられる。「～デ～ニ会う」ではデ ニの誤選択が上位を占める。

八木公子（1996）

100時間終了の留学生、17名の自由作文を分析した。

助詞別正用階層はト、ノ、カラ、ヲ、ニ、ハ、デ、ガの順となった。（高い方から）ニの機能別正用率は目的、動作の相手、行き先、存在の場所、時の順となっており、時のニが最も正用率が低い。

生田守・久保田美子（1997）

上級者の助詞機能別、穴埋め式客観テストによる誤答分析である。

ニに関しては1，意味機能別の正答率の差が、ヲ・デに比べて大きい、2，機能の中で正答率が低いものは「対象」であり、「対象」に対してはヲの過剰一般化が起こっている。3，「感情を表す」動詞につくニの誤答が多く、デ、ヲの誤選択が多く見られる。4，「用途」の誤答（オミヤゲニナニ買う）ではヲ、デ、ニ誤選択が多く見られる。

上村文子（1999）

中級学習者の作文による誤用分析を行った。

混同による誤用はハノガ、ヲノガ、ニノヲ、ニノデ、ニノハの順に多い。ニノヲの混同には「自動詞+ニ」の自動詞を他動詞と取り違えたと思われるヲの過剰一般化が見られる。

今井洋子（2000）

「精神的活動動詞」と共起する名詞の対象を表す格「に」「を」に関して上級学習者に穴埋め式テストを実施した。

「に」は「を」と混同しやすく、「を」の過剰一般化が起こっている。

格助詞習得は動詞の理解度と関わりがあり、「ヒト名詞+が」「が+自動詞/を+他動詞」というパタン形成のストラテジーが見られる。

上村文子・舛井雅子（2002）

穴埋め式テストによる結果の正答率はガ、デ、ニ、ヲの順である。

作文誤用調査の結果は初級学習者＝ニ、中級学習者＝カラ・ニの誤用が多い。

結果は、調査方法や対象者によって左右されるので、習得困難な格助詞や格助詞の用法を一概に特定はできないが、上に列挙した先行研究から次のようなことは言えるだろう。

- 1 - 格助詞ガ・デ・ニ・ヲは習得が難しく、格助詞へ・カラ・マデ・ヨリ・トは習得が比較的容易である。
- 1 - 格助詞ニの用法については「存在の位置」と「対象」を表す用法の習得が困難であるという結果が多い。その他に「用途」(生田・久保田)「時」(八木)及び「感情を表す動詞につくニ」(生田・久保田)の習得が遅いと指摘する研究がある。
- 1 - 「存在位置」を表す格助詞ニはデとの混同が(水谷・津留他・久保田・迫田・上村)、「対象」を表す格助詞ニはヲとの混同が多い(生田他・今井・上村)。また「対象」を表す格助詞ニにはヲの過剰一般化が見られる。(生田他・今井・上村)

以上から、ニが格助詞の中では習得困難なグループに入ること、ニの中では「存在の位置」を表すニと、「対象」を表すニが学習者にとって難しいという指摘が多いことがわかる。本稿は格助詞ニの中でも習得が難しいと言われる「存在位置」を表す格助詞ニについての学習者の習得の実態を調べた。

§ 2 調査の方法と対象者

格助詞ニの習得状況を調査するためアンケートを実施した。アンケートの形式・対象者は以下のとおりである。

§ 2 - 1 調査の方法

アンケートは助詞部分の穴埋めテスト形式で、設問の初めにガ、ニ、ヲ、デ、カラ、マデ、へ、トのいずれかを選択して()内に入れ、ハは選択しないようにという指示をした。設問数は38問、他にダミーの設問を入れてある。設問は次のようなものである。

2 - 1)すみませんが、^{たな}棚にあるかばんを^{した}下()^お降ろしてください。 1

内番号は設問番号、以下同様

設問に使用する語彙は出来るだけ日本語習得の初級段階で履修する語彙とした

が、文脈によっては、やむをえず、初級では履修しない語彙も少数使用した。調査文中の動詞はすべて『みんなの日本語 初級本冊』（1998）『みんなの日本語初級本冊』（1998）に所収の動詞である。『みんなの日本語 初級本冊』『みんなの日本語初級本冊』は現在広く使用されている初級用日本語教科書であり、調査対象者の多数は本書で日本語を学習した経験を持っていると思われる。設問文は日本語としての自然さを重視するより、中級程度の日本語理解力の者に充分理解できる程度の文とすることを第一の目標として作成した。

穴埋め問題においては「空欄周辺に注意が集中しすぎて、文全体からの判断がなされないための誤用が多い」（小林2001）という指摘がある。本調査が穴埋め式テスト形式を取っている以上、このような文全体を俯瞰しにくいという欠点は承知しておかなければならない。設問文をできるだけ単文とし、中級程度の学習者が容易に理解できる文とすることにして、このような欠点に配慮した。

§ 2 - 2 調査の対象

調査対象者は熊本市内の大学・日本語学校で学ぶ学習者と熊本市在住の外国人、及び参考のために調査した日本人である。アンケートの設問は日本語初級程度を履修していれば回答可能であるが、設問数が多く、ある程度のスピードで日本語を理解できなければ量的に無理があると思われたので、調査対象は中級レベル以上の日本語理解力を有する者とした。対象者の出身国は中国・台湾19名（うち台湾4）、韓国6名、イギリス3名、ドイツ3名、アメリカ2名、カナダ1名、インドネシア名1、マレーシア1名、アイルランド1名、ブラジル1名である。

調査対象者を次のように3つのグループに分け、能力別の習得状況を調査できるようにした。

Aグループ：アンケートの助詞の問題の正解率が90%以下で、現在、第二言語として日本語を学習中である。Aグループの対象人数は23名である。

Bグループ：アンケートの助詞問題の正解率91%以上で、日本語を十分に使いこなせる者である。上級から超上級レベルの日本語能力を持つと見られる。滞日年数は1年から30年までさまざまである。対象人数15名。

Cグループ：年齢・居住地域が同一ではない日本人、11名を対象とした。

なお、Bグループには現在は日本語学習者とは言えない者もいるが、大多数は日本語学習者であると言えるので、本稿では調査対象者のことを日本語学習者と呼ぶ。

次章・3章で「存在の位置」を表す格助詞二について、調査と分析の結果について述べる。

§ 3 存在の位置を表す格助詞二の習得

§ 3 - 1 誤用例

「存在の位置」を表すこと「動作の行われる場所」を表すデが混同しやすいことは、1章の先行研究の紹介でも述べたようによく報告されていることである。このような「場所」に関することデの混同の例を学習者の作文から示す。(例文3 - 1) ~ 3 - 4) は舛井(2002)による。3 - 5) ~ 3 - 7) は筆者収集)

デ ニ

3 - 1) * 山の上ニみんなはいっしょにしゃしんをとりました。(初級・タイ)

3 - 2) * この林ニわたしたちはごはんを食べました。(初級・ブラジル)

3 - 3) * ちかくのビルニ火事が起こった。(中級・韓国)

ニ デ

3 - 4) ? ロープウェイのところデ、みやまきりしまの花がたくさん咲いていました。(中級・マレーシア)

3 - 5) * 私の国デは火山がありません。(中級・マレーシア)

3 - 6) * 妹はアメリカデ留学しています。(中級・中国)

3 - 7) * いろいろ国デ住みましたが中国ほどすみやすいところはありませんでした。(中級・中国)

上記の例にも見られるように、学習者の作文の誤用には、デをとるべき動作動詞にニをつけたり、ニをとるべき存在動詞の「ある」にデをつけたりする二の用法の基本的認識が定着していないと思われる誤りと、「起こる」「留学する」「住む」のように存在動詞と動作動詞の区別が難しい動詞に関する誤りが見られる。前者は初級学習者に見られることが多く、後者は中級以上の学習者に見られることが多い。

本稿の調査は中級レベルの学習者を対象としたので、前者のような誤りはあまり見られなかったが、後者のような誤りは多く見受けられた。

§ 3 - 2 ニとデのユニット形成のストラテジー

ニとデが混同しやすい原因について、迫田（2001）は次のように述べている。

「に」と「で」の使い分けが困難な理由として、日本語学習者がユニット形成のストラテジーをとっている可能性がある。学習者は近くの語である前の名詞に着目し、「位置を示す名詞（例：中、前）+に」や「地名や建物を示す名詞（例：東京、食堂）+で」のユニットを形成し、後続の動詞に関係なく助詞を選択するというルールを作り上げていると考えられる

迫田の言うように、学習者は位置を示す名詞（中・前など）と地名や建物を示す名詞（東京・食堂など）にニやデのユニットを形成する傾向があるのだろうか。

ニとデのユニット形成の実態を調べるため、アンケートでは次の3 - 3 - に留意して、設問を設定した。

3 - 3 - 1) 一つの動詞に「位置を表す名詞」か「地名や建物を示す名詞」をつけて2種類の設問文を設定し、学習者が「位置を表す名詞」または「地名や建物を示す名詞」にニかデのどちらを選択するか観察できるようにする。

3 - 8) ロッカー () 入れておいたかぎが見つかりません。 3

3 - 9) いつも子供の写真を財布の中 () 入れています。 4

3 - 3 - 2) ニ・デどちらも選択可能な動詞に「位置を表す名詞」または「地名や建物を示す名詞」をつけて、学習者が「位置を表す名詞」または「地名や建物を示す名詞」にニかデのどちらを選択するか観察できるようにする。

3 - 10) このバスは大学の前 () 止まりますか。 37

3 - 11) 電車は立田口駅 () 止まります。 <38

『みんなの日本語 初級本冊』（1998）『みんなの日本語初級本冊』（1998）所収の場所名詞を取る動詞の中から、表2に3 - 3 - 1) の視点から作成した設問と、その他の主な動詞を含む設問を、表3に3 - 3 - 2) の視点から作成した設問を示す。表2にはAグループとBグループについて、表3にはそれに日本人のCグループを加えて日本人の意識も参考にしながら、それぞれのグループが、助詞ニとデのどちらを選択したかを記した。

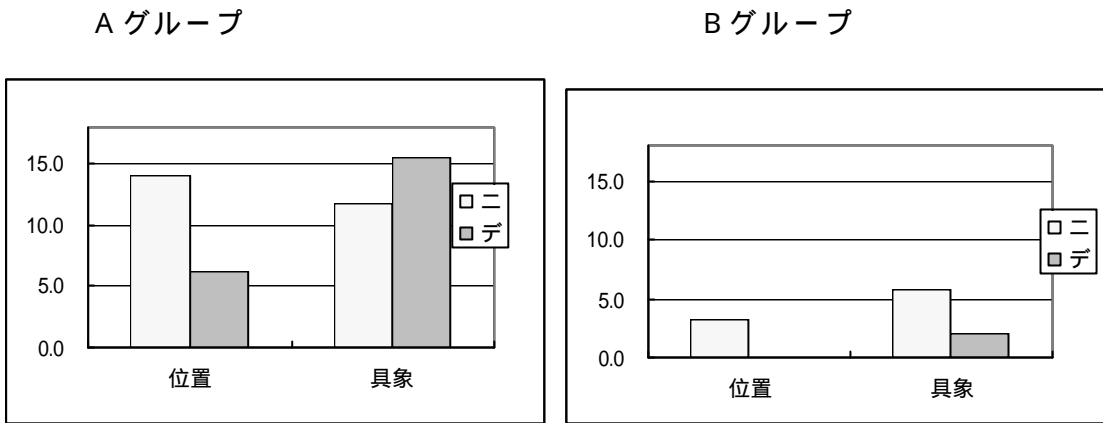
また、表2をもとに作成したニとデの選択率のグラフを図1に、表2をもとに作成

したニとデの選択率のグラフを図2に示す。

表2 存在の位置を表す格助詞ニに関する設問・およびニ・デ選択数

設問 番号	設問	助詞	ニ/デを取る 動詞	ニ/デ格 名詞句	Aグループ			Bグループ		
					ニ	デ	その他	ニ	デ	その他
1	すみませんが、棚にあるかばんを下()降ろしてください。	ニ	降ろす	下	19	0	4	14	0	1
2	二階の荷物を一階()降ろすのを手伝ってくれないか。	ニ	降ろす	一階	16	2	5	13	0	2
3	ロッカー()入れておいたかぎが見つかりません。	ニ	入れる	ロッカー	20	1	2	15	0	
4	いつも、子供の写真を財布の中()入れています	ニ	入れる	中	21	2		15	0	
5	危ないですから、ナイフを椅子()置かないでください。	ニ	置く	椅子	20	2	1	14	0	1
6	あなたのかばんは棚の上()置いておきました。	ニ	置く	上	22	1		15	0	
7	兄は今、アメリカ()います。	ニ	いる	アメリカ	20	3		15	0	
8	テレビの横()ねこがいます。	ニ	いる	横	22	1		15	0	
9	ご主人はどちら()勤めていらっしゃいますか。	ニ	勤める	どちら	9	11	3	14	0	1
10	兄はホンダ()勤めています。	ニ	勤める	ホンダ	8	12	3	13	2	
11	あなたは今どこ()住んでいますか。	ニ	住む	どこ	19	4		14	1	
12	私は留学生会館()住んでいます。	ニ	住む	留学生会館	14	9		14	1	
13	田中さんは来週、東京()引っ越します	ニ	引っ越す	東京	20	1	2	10	0	5
14	わたしは今度、駅の近く()引っ越します。	ニ	引っ越す	近く	23	0		14	0	1
15	3時までには会社()戻らなければなりません。	ニ	戻る	会社	16	3	4	11	0	4
16	読み終わった本は、本棚()戻しておいてください	ニ	戻す	本棚	22	0	1	14		1
17	道子さんは皿をテーブル()並べました。	ニ	並べる	テーブル	18	5		15	0	
18	掃除しますから 部屋の外()出てください。	ニ	出る	外	14	2	7	4	1	10
19	コップを床()落として割ってしまいました。	ニ	落とす	床	8	1	14	14	0	1
20	大切なカメラをアメリカ()落としてしまいました。	デ	落とす	アメリカ	2	21		3	0	
21	ゴミをドアの前()出しておいてください。	ニ	出す	前	21	1	1	15	0	
22	電車の中()大きな声を出してはいけません。	デ	出す	中	5	17	1	0	15	
23	映画館ではいつも前の方()座ります。	ニ	座る	前の方	17	4	2	14	1	
24	道子さんは帰りの電車()やっと座れました。	デ	座る	電車	6	15	2	2	13	
25	ルナという喫茶店の前()待っています。	デ	待つ	前	5	18		1	14	
26	夏休みは涼しい図書館の中()勉強することにしています。	デ	勉強する	中	2	21		0	15	
27	鶴屋デパートの4階()青いシャツを買いました。	デ	買う	4階	4	18	1	1	14	
28	よう子さんは喫茶店()働いています。	デ	働く	喫茶店	2	21		0	14	1
29	いつもどこ()食事しますか。	デ	食事する	どこ	2	19	2	1	14	
30	私は外()食事するのは好きじゃありません。	デ	食事する	外	1	20	2	1	14	
31	毎年、夏休みは海()泳ぎます。	デ	泳ぐ	海	2	17	4	0	12	3
32	このレストラン()おいしい中華料理が食べられるそうです。	デ	食べられる	レストラン	3	15	5	0	14	1

図1 ニ/デ選択率(表2より)

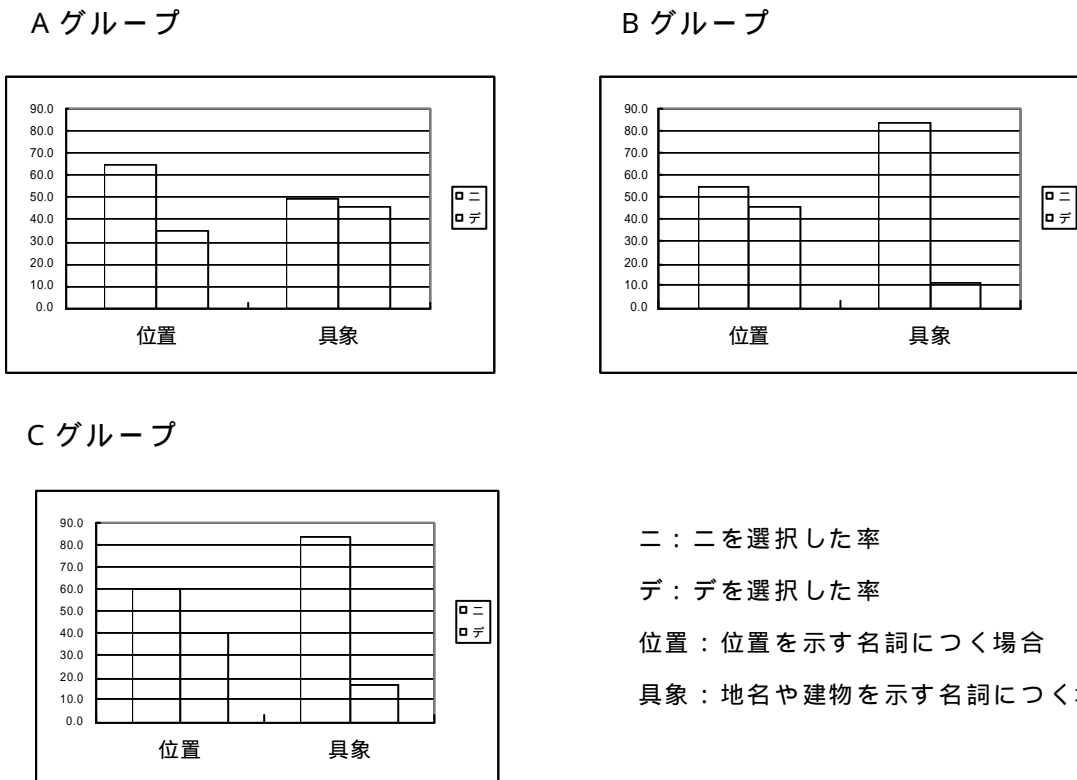


ニ：ニを選択した率 位置：位置を示す名詞につく場合
 デ：デを選択した率 具象：地名や建物を示す名詞につく場合

表3 存在の位置を表す格助詞ニに関する設問・およびニ・デ選択数

設問 番号	設問	助詞	ニ/デを取る 動詞	ニ/デ格 名詞句	Aグループ		Bグループ			Cグループ		
					ニ	デ	ニ	デ	その他	ニ	デ	
33	このバスは大学の前()止まりますか。	ニ/デ	止まる	前	15	8	9	6		6	5	
34	電車は立田口駅()止まります。	ニ/デ	止まる	立田口駅	15	6	2	14	1		9	2
35	きのうはどこ()泊まったんですか。	ニ/デ	泊まる	どこ	8	14	1	8	6	1	11	
36	東京でビジネスホテル()泊まりました。	ニ/デ	泊まる	ビジネスホテル	13	10		15			11	

図2 ニ/デ選択率(表3より)



ニ：ニを選択した率
 デ：デを選択した率
 位置：位置を示す名詞につく場合
 具象：地名や建物を示す名詞につく場合

表2・図1と表3・図2をもとに、まず全体的なニとデの選択傾向を見、それからそれぞれの動詞のニとデの選択内容について見ていく。

図1から、次のような傾向が認められる。

3 - 位置を示す名詞につく場合は、ニの選択が多い。Aグループ、Bグループともにその傾向が顕著である。

3 - 地名や建物を示す名詞につく場合は、Aグループはデの選択が多いが、Bグループは逆にニの選択が多い。

図2からは次のような傾向が認められる。

3 - 位置を示す名詞につく場合は各グループともニの選択率のほうが高い。ニの選択率はAグループが一番高く、Bグループ > Cグループと日本語の習熟度が増すにつれて低くなり、デの選択率が高くなる。

3 - 地名や建物を示す名詞につく場合は、3 - と同じくニの選択率のほうが高いが、ニの選択率は、3 - の結果とは逆にAグループが一番低く、Bグループ < Cグループと日本語の習熟度が増すにつれて高くなり、デの選択率は低くなる。

3 - Bグループのグラフは「位置」「具象」ともにAグループとCグループの中間のパターンを示している。

3 - ~3 - の観察結果から、ニとデのユニット形成の傾向については、次のようなことが言えるだろう。

3 - Aグループは位置を示す名詞につく場合はニを選択する傾向が強く、地名や建物を示す名詞につく場合はデを選択する傾向がある。つまり迫田のいうユニット形成の傾向が見られる。

3 - Bグループは位置を示す名詞につく場合も、地名や建物を示す名詞につく場合もニの選択のほうが多い。特に「位置を示す名詞 + ニ」「地名や建物を示す名詞 + デ」のユニット形成の傾向は見られない。しかしBグループはニ・デの使用に関してはAグループとCグループの中間のパターンを示しており、ニとデのユニット形成のストラテジーの痕跡を残しているという見方もできる。

各グループのニとデの全体的な選択率を見ると次のようになっている。

表4 グループ別 ニノデ選択率

	Aグループ	Bグループ	Cグループ
ニを選択	55.3%	62.2%	67%
デを選択	37.9%	31.2%	30.6%

Cグループ、Bグループ、Aグループの順でニの選択率が多く、デの選択率は少なくなっている。Cグループは日本語の標準的な使用率を表していると考えられるので、Aグループはデを選択しがちな傾向があるということである。

3- つまり存在の位置表す格助詞ニに関する全体的な観点から言っても、Aグループにはデの過剰使用の傾向があるということが言える。

次にそれぞれの動詞についての、ニとデの選択傾向を見る。

表5(次頁)は、表2をニとデの誤選択数の多い順に並べ変えたものである。表5によってニとデを混同しやすい動詞、および名詞と動詞の組み合わせがわかる。

表5から、ニとデ誤選択数の多い主な動詞について、それぞれの特徴を考察する。

<勤める>

「勤める」の回答のうち90%がニとデの誤選択による誤りであり、他の助詞の選択例は少ない。前接の名詞との関係を見ると、「どちら」と「ホンダ」のニとデの誤選択率に大差はない。ということは、誤選択の誤りは前接する名詞の種類よる誤りというより、「勤める」という動詞がニとデの区別の難しい動詞であるということがわかる。

<住む>

表5では「住む」は地名や建物を示す名詞・「留学生会館」につく場合のほうがデを選択しやすい傾向があると出ている。(デ誤選択数9)「地名や建物を示す名詞+デ」のユニット形成のストラテジーが働いた結果であるとも見られるが、他の動詞に比べて二格名詞句・「留学生会館」「どこ」(デ選択数4)のどちらもニ デ誤選択数は多い。「勤める」と同様「住む」もニとデの区別が難しい動詞であるということがわかる。

水野(1987)は「(英語を母語とする者は)「住む」「つとめる」「集まる」などについてはlive, work for, get, togetherなどと考えるせいか動作性を感じて「で」を用いてしまう。」と指摘している。本調査でも「勤める」と「住む」にはデの選択が多く、水野の調査と同様の結果が出ている。ただし、下記の表6からもわかるように、中国語を母語とするグループの正答率も低いことから、こ

の傾向は水野の言う「英語を母語とする者」に限ったものではないようである。

表5 ニ/デ誤選択順 (表2より) 回答数38

順位	設問番号	助詞	動詞	名詞・疑問詞	ニ/デ誤選択数
1	10	ニ	勤める	ホンダ	デ12
2	9	ニ	勤める	どちら	デ11
3	12	ニ	住む	留学生会館	デ9
4	26	デ	座る	電車	ニ6
4	27	デ	待つ	前	ニ6
6	19	ニ	並べる	テーブル	デ5
6	24	デ	出す	中	ニ5
8	11	ニ	住む	どこ	デ4
8	25	ニ	座る	前の方	デ4
10	29	デ	買う	4階	ニ3
10	7	ニ	いる	アメリカ	デ3
10	17	ニ	戻る	会社	デ3
10	34	デ	食べられる	レストラン	ニ3
14	28	デ	勉強する	中	ニ2
14	30	デ	働く	喫茶店	ニ2
14	31	デ	食事する	どこ	ニ2
14	33	デ	泳ぐ	海	ニ2
14	21	デ	落とす	アメリカ	ニ2
14	20	ニ	出る	外	デ2
14	4	ニ	入れる	中	デ2
14	5	ニ	置く	椅子	デ2
14	2	ニ	降ろす	一階	デ2
23	3	ニ	入れる	ロッカー	デ1
23	6	ニ	置く	上	デ1
23	8	ニ	いる	横	デ1
23	22	ニ	落とす	床	デ1
23	32	デ	食事する	外	ニ1
23	32	ニ	引っ越す	東京	デ1
23	23	ニ	出す	前	デ1
30	18	ニ	戻す	本棚	
30	1	ニ	降ろす	下	
30	2	ニ	引っ越す	近く	

表6 「勤める」「住む」母語別正答率

動詞 母語	中国語(19名)	英語(6名)	韓国語(6名)
勤める	55.3%	66.6%	75%
住む	71.1%	83.3%	91.7%

< 待つ >

誤答の全部がデ 二の誤選択である。「待つ」については本調査では、設問 25 のほかに3 - 12) のような設問も設けた。

3 - 12) ルナという喫茶店の前 () 待っています。 25

3 - 13) わたしは熊本駅で長い間あなた () 待っていました。

3 - 13) の選択状況はニ6名、デ3名、ガ3名である。3 - 12), 13) とともに二の誤選択が多いことから判断すると、「待つ」という動詞は場所名詞を取る場合に限らず、二を選択しがちな動詞であると言えるようである。「会う」が助詞二をとるため、「会う」との連想から、「待つ」も二をとると思ってしまうのだと言った留学生(中国) がいたが、「待つ」は他動性も動作性も感じ取りにくいいため、助詞ヲでも助詞デでもなく、二を選んでしまうのであろうと思われる。

< 並べる >

A グループの5人がデを誤選択している。助詞二をとる「勤める」「住む」、あるいは助詞デをとる「待つ」などと違って、場所名詞につく「並べる」の場合は、3 - 14, 15) のように文脈によっては、二もデも選択可能な動詞である。

3 - 14) 道子さんは皿をテーブル (二) 並べました。 21

3 - 15) 道子さんは食堂デ皿を並べました。

そのため、動詞だけでは助詞は決定できず、文脈からの判断が要求される。設問 21 は平易で短い文であるので、学習者に文脈がとれないというほど難しい文ではない。2章で述べたように、空欄周辺に注意が集中するため文全体を見誤りやすいという穴埋め問題の欠陥についても考慮に入れなければならないが、むしろ、文全体を配慮に入れる余裕がなかったための誤選択であると考えられる。上級レベルになると本調査の設問程度の単純な文では、文脈を簡単に見定めることができるためか、Bグループに誤答はない。

< 座る・出す >

表5の中で、二 / デ誤選択の多い動詞であるが、次節3.3で考察する。

次に、表3における動詞で、二もデもともに選択可能な動詞について見る。

< 止まる > < 泊まる >

表7(下記)は「止まる」と「泊まる」とともに二もデも選択可能であるが、共起す

る名詞・疑問詞の違いによることでの選択率を示したものである。

表7 「止まる」「泊まる」 ニ/デ選択率

Aグループ

設問	動詞	名詞・疑問詞	ニ(%)	デ(%)
33	止まる	前	65.2	34.7
34	止まる	立田口駅	65.2	26.0
35	泊まる	どこ	56.6	43.5
36	泊まる	ビジネスホテル	34.8	60.9

Bグループ

設問	動詞	名詞・疑問詞	ニ(%)	デ(%)
33	止まる	前	60.0	40.0
34	止まる	立田口駅	93.3	6.6
35	泊まる	どこ	100	0
36	泊まる	ビジネスホテル	53.3	40.0

Cグループ

設問	動詞	名詞・疑問詞	ニ(%)	デ(%)
33	止まる	前	54.5	45.5
34	止まる	立田口駅	81.8	18.2
35	泊まる	どこ	100	0
36	泊まる	ビジネスホテル	100	0

3 - 16) (設問 36) はデが二つ重なることになるので、()にデは入りにくいはずである。

3 - 16)東京でビジネスホテル()泊まりました。 36

それでもAグループはデを多く選択している(デ選択率60.9%)。Bグループも、Cグループがデを全く選択していないことを参考にすれば、Aグループのデの選択率は高い。設問 36 は「地名や建物を示す名詞+デ」のユニット形成のストラテジーが働いた結果を表していると考えられる。

しかし、設問 35 (「どこ()泊まったんですか」)もAグループのデの選択が多い(デ選択率43.5%)。Bグループも、Cグループもデの選択率が0%であることを考えあわせれば、日本語習得のレベルの低いグループのデの選択の多さが目立つ。

「止まる」に関しては、位置を示す名詞・「前」(33 このバスは大学の前()止まりますか)のほうが地名や建物を示す名詞・「竜田口駅」(34 電車は竜田口駅()止まります)よりデの選択が多い。これは二とデのユニット形成のストラテジーに反する結果である。Cグループは「前」(37)にデを多く選択していることから、「このバスは大学の前デ止まりますか」という表現が標準的であると思われる。日本語学習者も日本人の自然な表現と同じようにデを選択したものであり、自然な表現のほうを優先し、二とデのユニット形成のストラテジーが働かなかった結果であろう。

以上の各動詞についての分析をまとめると次のようになる。

3 - 「勤める」「待つ」には「位置を示す名詞+二」「地名や建物を示す名詞+デ」のユニット形成のストラテジーは見られず、二あるいはデの誤選択率は高い。動詞が助詞の選択を迷わせたと思われる。助詞の決定要因は名詞ではなく、動詞にあるということを表している。

3 - 「泊まる」には二とデのユニット形成のストラテジーが働いたと思われる結果が出ているが、「止まる」には二とデのユニット形成のストラテジーは見られない。両動詞とも「勤める」「止まる」「待つ」と同様に、動詞自体にデを選択させやすい要因があると思われる。

3 - 「住む」は、「地名や建物を示す名詞+デ」のユニット形成のストラテジーは存在する。しかし「どこ」につく助詞にもデの選択は他の動詞に比べて多く、動詞の意味が「勤める」とともに動作性を感じさせて、デが選択されやすい要因がある。

3 - 「並べる」の助詞決定の要因は名詞の問題というより、文脈の意味を正確に読みとる能力の問題に帰する。

すなわち、二とデを混同しやすい個々の動詞を見ていくと、二とデの混同は、前接する名詞との関係、動詞の孕んでいる要因によるもの、文脈を読みとる能力に関わる要因などが関わっており、一様ではないということがわかる。

次節では、動詞が二とデあるいはヲの誤選択にどのように関わってくるかを考察する。

§ 3 - 3 格助詞二をとる動詞のパターン化

動詞「出す・座る・入る」は場所名詞と共に使われる場合、文脈によって格助詞二でもデでもあるいはヲでも取りうる。日本語学習者はこれらの動詞がとることデとヲをどの程度正確に選択できるのかだろうか。このことを調べるため 19～24、37、38 の設問を設定し、文意の違いによって変わる助詞二・デ・ヲの選択状況を調査した。

アンケートの結果から、「落とす・出す・座る・入る」に関する設問と二ノデノヲの選択数を表 8 に、正答率を表 9 に示す。

表 8 存在の位置を表す格助詞二に関する設問および二ノデノヲ選択数

設問 番号	設問	助詞	動詞	名詞	Aグループ			Bグループ		
					二	デノヲ	その他	二	デノヲ	その他
19	コップを床()落として割ってしまいました。	二	落とす	床	8	1	14	14	0	1
20	大切なカメラをアメリカ()落としてしまいました。	デ	落とす	アメリカ	2	21	0	3	12	0
21	ゴミをドアの前()出しておいてください。	二	出す	前	21	1	1	15	0	0
22	電車の中()大きな声を出してはいけません。	デ	出す	中	5	17	1	0	15	0
23	映画館ではいつも前の方()座ります。	二	座る	前の方	17	4	2	14	1	0
24	道子さんは帰りの電車()やっと座れました。	デ	座る	電車	6	15	3	2	13	0
37	どうぞ、この部屋()入ってください。	二	入る	部屋	21	1	1	14	0	1
38	この門()入ってまっすぐ行くと 図書館へ行けます。	ヲ	入る	門	14	ヲ6	3	7	ヲ8	2

表 9 動詞別正答率

動詞	Aグループ		Bグループ	
	二 (%)	デノヲ (%)	二 (%)	デノヲ (%)
落とす	76	91.3	100	80
出す	95.7	78.3	100	100
座る	73.9	65.2	93.3	86.7
入る	91.3	39.1	100	53.3
平均正答率	85.9	68.4	98.3	80

< 凡例 >

二：二が正解である設問の正答率

デノヲ：デまたはヲが正解である設問の正答率

表 9 から次のことが言える。

3 - 平均正答率は A グループ、B グループともに、格助詞二のほうが格助詞デ

ノヲの正答率より高く、その差は大きい。それぞれの動詞の正答率についても、Aグループの「落とす」とBグループの「出す」(100%)以外はすべて二の正答率のほうが高い。

3 - Aグループの「落とす」については、Bグループのほうが正答率が低く出ている。設問 20 (表 8) はAグループにはわかりにくい設問ではないかと思われるが、正答率が高率なのは意外な結果である。理由としては「アメリカ」につく助詞として「地名や建物を示す名詞 + デ」のユニット形成のストラテジーが働いたためデを選択したのかと思われる。

表 8 の動詞の二またはデ/ヲの選択率は次のとおりである。

Aグループ：二の選択率57%	デ/ヲの選択率35.9%	その他7%
Bグループ：二の選択率56.5%	デ/ヲの選択率40.2%	その他3.3%

3 - 二とデ/ヲの正解は50%ずつであるので、上記からも回答が二に偏っている事がわかる。

3 - から「落とす・出す・座る・入る」などは、学習者がこれらの動詞は助詞二を取るという印象を強く持っており、3 - で述べたように特別のストラテジーが働いた場合は別であるが、デやヲなどは選択されにくということがわかる。助詞の決定には学習者には「落とす・出す・座る・入る」は二をとる動詞であるという思いこみがあり、「落とす・出す・座る・入る + 二」というパターンが形成されていると見られる。

§ 3 - 4 結論

迫田(2001)の言うところの、「位置を示す動詞 + 二」「場所を示す動詞 + デ」のユニット形成のストラテジーについて、日本語中級および上級の学習者に二とデのユニットを形成する傾向は確かにあると言える。しかしそのことをもって日本語学習者が助詞を決定する際に、直前の名詞から助詞を判断していると結論づけるのは早計である。各動詞のそれぞれの誤答の原因を見ていくと、動詞自体が誤答の原因となる難しさを孕んでいるものがある。「住む」「勤める」のように学習者が動作性を感じて助詞デを選択、あるいは逆に「待つ」のように動作性を感じないために助詞二を選択してしまうもの、「落とす・出す・座る・入る」のように「落とす・出す・座る・入る + 二」というパターンを形成してして助詞の選択を誤るものなどである。また、「並

べる」や「落とす・出す・座る・入る」のように文脈によって助詞の変わるものは、文脈の読みとりが正確でないために助詞を誤るものもある。

助詞決定の際、名詞か動詞のどちらかが判断材料として優先されるというより、名詞と動詞の双方が助詞決定の判断材料とされている。格助詞が本来、名詞と動詞の関係によって決定されるものである以上、日本語学習者が格助詞を決定する際に名詞と動詞の関係において格助詞を考えるのは当然であろう。日本語学習者が格助詞を決定するときに、名詞を重視するのか、動詞を重視するのかという疑問には、単純にどちらかというわけではなく、両方であると言わざるをえない。その際、迫田の言うことデのユニット形成のストラテジーやある種の動詞（本稿では「落とす・出す・座る・入る」について考察した）に「動詞＋助詞」のパターン形成のストラテジーなどが用いられることもある。文脈によって助詞が変わる場合は、名詞と動詞によって助詞が判断された後、文脈が考慮に入れられる。文脈は名詞と動詞の次の段階で助詞決定に關与する要因である。

§ 4 おわりに

存在の位置を表す格助詞ニについては、先行研究の言うように「位置を示す名詞＋ニ」と「地名や建物を示す名詞＋デ」のユニット形成や「ヒト名詞＋ガ」のストラテジーをとる傾向があるという結果が得られたが、助詞の決定判断には名詞句の種類によるばかりでなく、後続の動詞と助詞をセットで記憶しており、助詞を決定する際にはまず「動詞＋助詞」のユニットが優先される場合もあるということもわかった。

助詞決定の際には、名詞か動詞のどちらかを重視するというのではなく、名詞と動詞の双方が助詞決定の判断材料とされており、格助詞の決定にはまず、名詞と動詞と助詞の関係が考慮され、次の段階で、文脈に対する配慮が關与すると思われる。

それぞれの動詞には、全体的傾向からでは計り得ないそれぞれの異なる誤答の要因があった。同様に、個々の学習者にもそれぞれの誤答の理由がある。個別の学習者と向き合っている日本語の現場にいる者としては、ここで得られた全体的な傾向があることを念頭に置きつつ、それぞれの学習者の誤答にはそれぞれの理由があることを再認識して、個々の学習者の指導を心掛けていかねばならないだろう。

[参考文献]

- 生田守・久保田美子(1997)「上級学習者における格助詞「を」「に」「で」習得上の問題点」『日本語国際センター紀要』第7号 国際交流基金日本語国際センター
- 奥田靖雄(1983)「二格名詞と動詞の組み合わせ」『日本文法連語論・資料編』むぎ書房
- 上村文子(1999)「中級学習者の助詞の誤用」『熊本大学留学生センター紀要』3号 熊本大学留学生センター
- 上村文子・舛井雅子(2002)「第2言語としての日本語における格助詞習得の諸問題」『熊本大学留学生センター紀要』6号 熊本大学留学生センター
- 久保田美子(1993)「第2言語としての日本語の縦断的習得研究 - 「を」「に」「で」「へ」の習得過程について」『日本語教育』82号 日本語教育学会
- 国立国語研究所(1951)『現代語の助詞・助動詞』秀英出版
- 小林典子(2001)「学習者の文法処理方法」『日本語学習者の文法習得』大修館書店
- 迫田久美子(2001)「誤用の隠れた原因」『日本語学習者の文法習得』大修館書店
- 城田俊(1993)「文法格と副詞格」仁田義雄編『日本語の格をめぐって』くろしお出版
- 杉本武(1986)「格助詞」奥津敬一郎他『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社
- 角田太作(1992)『世界の言語と日本語』くろしお出版
- 津留紀子・舛井雅子・柳田恵里子(1998)「会話力の獲得を中心とした初級日本語における助詞習得の問題とその指導」『熊本大学留学生センター紀要第2号』 熊本大学留学生センター
- 水谷信子(1987)「助詞指導 - 英語との対応 - 」『日本語教育』62号日本語教育学会
- 村木新次郎(1991)『日本語動詞の諸相』ひつじ書房
- 八木公子(1996)「初級学習者の作文にみられる日本語の助詞の正用順序」『世界の日本語教育』6 国際交流基金日本語国際センター

[参考資料]

- みんなの日本語 初級本冊 (1998)スリーエーネットワーク(編)スリーエーネットワーク
- みんなの日本語 初級本冊 (1998)スリーエーネットワーク(編)スリーエーネットワーク